

海外展示

木材を通じた北欧諸国との文化交流

菊池敏正

スウェーデン、ノルウェー、フィンランドの北欧3カ国及び日本におけるクラフトに焦点を当てた展覧会『Juxtaposing Craft』がストックホルム東アジア美術館（Östasiatiska）にて2022年10月15日から開催されている。私は、研究作品を展示するために10月2日からストックホルムに滞在し、会場設営を行なった。この展覧会は、「クラフト」という分野に焦点を当てつつ、その背景にある素材、技法、生活様式などの交流を促進させる狙いがある。また、持続可能な社会を実現するという、現代社会における大きなテーマを背景に、生活を彩る多様な作品の材料を資源として捉え、資源から構成される作品と生活の関係について、メッセージを社会へ発信していく試みでもある。そのため、木材を使用した作品が最も多い構成要素であり、加えてストックホルム東アジア美術館の収蔵品である様々な儀式等で使用される道具（文化財）も多く展示されている。美術館が収蔵する様々な文化財と、現代の作品が並列的に国境を超えて展示される本企画は、これまでに例の少ない企画であると言える。

この展覧会名における「クラフト」という言葉に対し、日本の「工芸」という定義は的確に当てはまらない部分もある。日本における「工芸」とは、用を持つ「美」という枠組みを超え、純粋芸術としても認識されており、加えて装飾的な芸術作品も多く含まれる。そのため、日本における伝統工芸作品は、昨今の日常的に用いられているクラフトという言葉とは異なり、鑑賞を目的とする美術品として位置付けられる場合が多い。また、作品制作の背景に、日本では人間国宝と

いう伝統技法を徹底的に追求した技の最高峰とも呼べる制度がある。これは、人間国宝が制作する作品はもちろんの事、無形文化財保持者として、日本の伝統的な技術を保存・伝承する事を目的としており、制作のための材料や道具までも広範囲に渡り保存する事へと繋がる役割を担う。このような違いを並列的に比較しつつ、技術や材料の側面から共通する部分を見出し、連動していく事が、展覧会の役割であるとも言える。そのため、主要な作品の構成材料である木材については、共通する部分も見出す事ができる。共通する材料の例として、針葉樹が挙げられる。北欧の寒い気候で少しずつ成長した松材は良質であり、日本の木曽檜や青森ヒバのように木目が詰まった状態である。時間をかけて乾燥させることで経年変化が少ない特徴を持つ。また、群生する針葉樹は、広葉樹と比較しても生産性の面で非常に効率の良い木材である。同質の木材を一定数確保できる点では、デザインのプロトタイプから生産までが

見込める材料であり、木質を熟知する事で、多様な加工が可能になる材料でもある。加工技術が上がるほど耐久性も増し、長期的な使用にも耐えうる材料であり、北欧諸国と日本を結ぶ大きな共通点の一つである。このような、良質な針葉樹を扱う地域が実践する資源への取り組み方を、文化交流の起点にする試みは、今後拡大していく事が予想される。北欧のデザインとしては、家具に代表される木工作品が有名である。これらの優れたデザインの背景には、戦後、柳宗理が日本のプロダクトデザインを紹介しつつ、木材の加工技術についても広く紹介した経緯が、北欧の家具デザインを大きく発展させる契機となったと現地では認識されている。このような素晴らしい前例に倣い、本企画を通じた人的交流が今後の工芸、デザインの分野を超えて、広く波及し大きな効果がもたらされるように努めていきたい。

私は、本展覧会において、数理模型をモチーフとする作品を13点使用し、イ

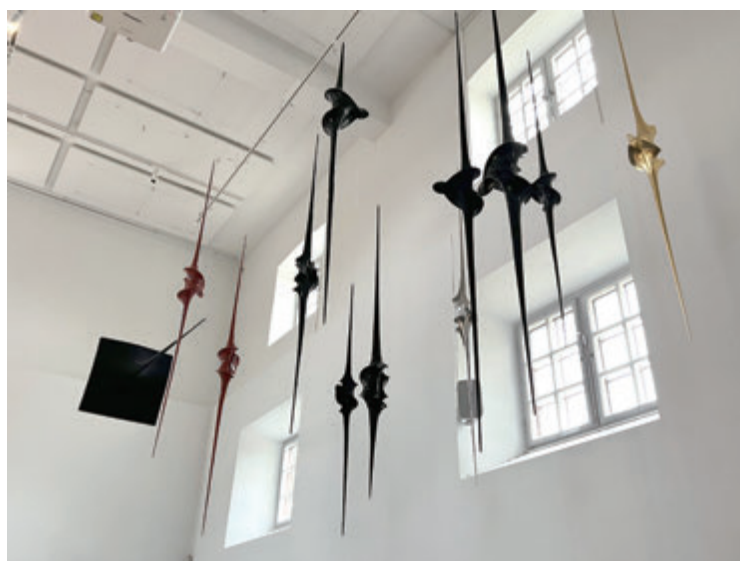


図1 会場の様子。

インスタレーションを試みた（図1）。このような、幾何学的な形態による作品をヨーロッパで展示する試みは、2018年ヴィクトリア&アルバート美術館（イギリス）、2019年ZKM（ドイツ）、2021年、ギメ国立東洋美術館（フランス）に次いで4回目である。展示会場は美術館のエントランスに近い場所であり、吹き抜けの構造で天井高が7m程ある。作品

の設置にはステンレス製のワイヤーを使用し、天井から慎重に吊り下げる作業を進めた。美術館の展示室各フロアからも見渡せる場所でもあり、様々な角度から確認しながら設営を遂行した。高所での作業であり、必要になるワイヤーも自ずと長いものになるが、丁寧にインストールしていくことで徐々に空間が構成されていく。現地スタッフのサポートもあり、

無事に設営を完了することができた（図2-4）。このようなインスタレーションは、同一の作品を使用しても会場毎に構成が大きく変化するものでもある。学術標本と現代美術の組み合わせが、このように複数の国で展開出来ている事は、自身にとって非常に貴重な体験でもあり、今後も継続していきたいと考える。レセプションではストックホルムのクラフトウィークと時期が近い事もあり、多くの来館者が訪れる結果となった。本展覧会は、今後さらに地域を広げつつ拡大していく構想もある。このような企画が、今後の日本でも多く実施されていくことが予想される中、大学博物館の展覧会企画にも活かせるよう、実践的な経験を積み重ねていきたい。



（本館インターメディアテク寄付研究部門
特任助教／文化財保存学）



図2 設営中の風景.



図3 設営中の風景.

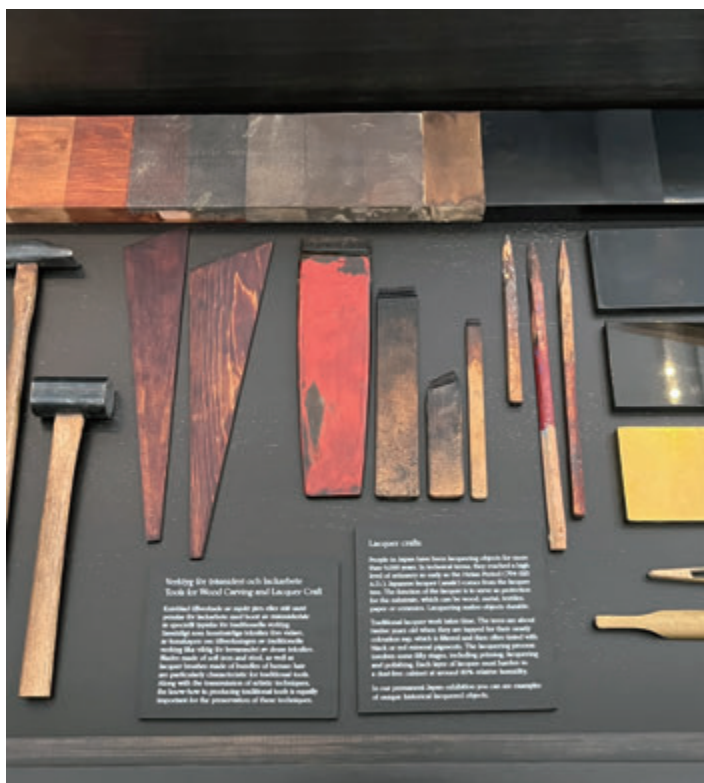


図4 展示品の例. 道具も合わせて展示した.